

# ローマ七大聖堂への靈的巡礼とイメージの役割 —再発見された逸名画家による《キリスト磔刑》の 意味内容と機能—

ヘント大学・慶應義塾大学  
杉山美耶子

12世紀以降、キリストと諸聖人に纏わる聖遺物が保管されたローマへの巡礼は、神との繋がりを再認識するだけでなく、罪を贖い、贖宥を獲得する機会を悔悛者に与えた。ハンス・メムリンク作《キリストの受難》(トリノ、サバウダ美術館)をはじめとし、聖都イエルサレムにおけるキリストの受難を瞑想する際に用いられたと考えられる絵画作品に関しては多岐にわたって論じられてきた。その一方で、ローマへの巡礼を靈的に追体験する際にイメージが果たした役割に関しては、先行研究において十分に議論されてきたとは言い難い。本発表では、ローマ七大聖堂への靈的巡礼を行う際に使用されたイメージの事例研究として、1500年頃にネーデルラントで制作された《洗礼者聖ヨハネ》(ユトレヒト、聖カタリナ女子修道院博物館)と《聖母子》(グリーンヴィル、ボブ・ジョーンズ大学美術館)、及び近年発表者が再発見した《キリスト磔刑》(個人蔵)の意味内容と機能を明らかにする。

靈的巡礼は、祈祷・瞑想等から構成される一連の宗教的実践を通して、記憶の中で目的地への道程を再構築する擬似巡礼行為である。実際の聖地巡礼が重要な宗教儀礼であり続けた一方で、中世末期、靈的巡礼は遠方に赴けない人々——特に修道士や修道女、その他観想的生活に重点を置いた半宗教的共同体——の間で、身体的巡礼に代わる代替手段として新たな人気を博した。靈的巡礼は時に、目的地の記述と、其処で贖宥を獲得するために必要な要件に関して詳述された挿絵付き手引書によって補助された。15世紀末に制作された『マーガレット・オブ・ヨークのローマ巡礼手引書』(ニューヘヴン、バイネック貴重書写本図書館)に代表されるように、15世紀から16世紀初期に制作されたローマ七大聖堂の巡礼手引書の場合、各聖堂の挿絵はAからGのイニシャルによって指示された。同手引書の挿絵に認められる構図とイニシャルの使用は、《洗礼者聖ヨハネ》と《聖母子》にも認められる。イニシャルAを伴う《洗礼者聖ヨハネ》は1981年にH. デュフォーによって、またイニシャルDを伴う《聖母子》は1997年にC. レイノルズによって、各々サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂とサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂への靈的巡礼を補助するために使用された絵画と特定された。本発表では第一に、上記二作品と《キリスト磔刑》の間に認められる類似性を指摘した上で、三作品の再構成を行う。第二に、《キリスト磔刑》画面内に記されたイニシャルに基づき、本作品の機能を特定すると共に、同様の目的で制作された絵画作品群との比較を行い、中世末期における靈的巡礼とイメージの役割に関して新たな知見を提示する。